

太平記における漢楚の故事

— 史記との比較文学的考察 —

増 田 欣

太平記の作者については、さまざまなことが言われてきた。洞院公定日記が伝える里賤の器「小島法師」の存在、および難太平記が言い残した「富方深重」と「書継」の問題、この僅かな史料をめぐって、それぞれの角度からする作品研究の成果との統一的な把握が試みられてきたわけである。

諸説のほとんどに共通するのは、太平記作者の知識人的性格という点である。「足見作^ニ太平記者之凡愚^ト」（参考太平記）のとき非難もあるにはあるが、「終始一貫してインテリの視角が持続されてゐる」^①という点は、太平記をすなおに読めば雖しも首肯し得るはずのものであるし、そのいわゆるインテリの視角が、「伝統的な身分関係と儒教的な道徳観をより所とする」^②ものであることも認められる。そして「宋学的な政治理論、都市人的な鋭利な批判、過去の軍記物文学ジャンルの継承等、相当高次の教養人を予想させられる」^③わけなのである。こうして都会人的知識人として捉えられる作者も、その出自や社会的位置という点になると甚だ曖昧で、おそ

らくは貴族出身の知識人（谷宏氏説）といったものから、土農層出身の叡山関係の僧侶の大幅な参与を説く（井上良信氏説）のものもあるし、名もない都市人（町衆の先駆的存在）の中に作者を求めようとする見解（桜井好朗氏）さえも行われている。作者を同じく僧侶と見るにしても、菅政友以来の山法師と見る説、禪僧と見る説（高木武氏）、山伏とする説（魚澄牧五郎氏・和歌森太郎氏）、物語僧とする説（富倉徳次郎氏）、散所法師とする説（松本新八郎氏）などの外、難太平記に見える恵嶺を作者の一人とする説（荒木良雄氏）、理尽抄以来の支恵説を一部認める説（石田吉貞氏）などもある。散所法師とか都市人とかの見解になると、そうした階層の文化がどの程度にまで進展しており、どの程度にまで文学的表現力を獲得していたかの問題が解明されなければ、太平記の知識人的性格との結びつきに不安を払拭できず、富倉氏が、卑賤な物語僧一般ではなくて、その中の「もとは公家的教養を受けた知識人で、^④「南北朝の戦乱時代の敗退者や、没落した公家関係の下級官吏」の如き者に限定される必要も、そこにあるわけである。とにかく仏語・漢語・雅語・俗語等々にわたる豊富な語彙や、先行戦記物語の文体の継承発

周勃・章邯などは漢楚合戦で活躍するメンバーである。この八名だけだけでなく、三百五十人のうち約七十五名は、この合戦に関係がある。すなわち漢楚合戦は、太平記における中国の故事の中で、その頻度においても、その規模の雄大さにおいても、圧倒的な重みをもつて描かれているのである。

高祖の名は、すでに将門記や陸奥話記などの先蹤作品にもあらわれる。

欲し越し山之心不憚、欲し破し綴之不力不弱、勝鬪之念、可し凌

高祖之軍。(将門記)

我狄強大、中国不能制、故漢高祖困平城之困、吕后怒不遜之詞。(陸奥話記)

などである。これら二書における中国故事は、すべて修辭的な引用で、説話としての興味が動機になっているものはない。そしてこの修辭的引用法は、以後の戦記物語作品に受け継がれる。

為朝は七尺ばかりなる男の(中略)兎をば耶等に持たせて歩み出でたる体、突増も斯くやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良にも劣らず。されば堅陣を破る事、呉子・孫子が難しとする処を得、弓は養由を喻ぢされば天を翔る鳥、地を走る獸、恐れずといふ事なし。(保元物語)

などが代表的な例である。突増・張良・呉子・孫子・養由等、勇猛な、あるいは智謀に秀でた、あるいは戦略・武術に長じた諸英雄の姿は、すでに読者層にとっても親しいものとなっており、それ故にこそ、これら武人的徳性を象徴する人物との単純な比較によって、より偉大な、より完全な為朝像を読者に彫寫させることができたのである。もちろん個々の人物については知悉していたわけではな

い。だから「力は突増・張良が如くつよく」(盛衰記卷三四)などと書いて憚らないのである。張良は多病の質で、その容貌は婦人好女の如きであった(史記・留侯世家)。その名には親しんでいながら、その実体はまだよく存知していない読者層が、知識的欲求の昂揚につれて、説話のより精確な記述を求めようになるのは自然の勢いであった。

単に武勇・智略などの英雄的性格の象徴的人物として譬喩的文節に借り用いられているほかに、漢楚合戦にまつわる故事が背景となつているものとしては、保元物語に、

重綱業宣、白河殿に参着して、「あなおそろし、鬼の打銅になりたりつる」とて、わなゝいてぞ下りたりける。漢の紀信、

高祖の車に乗りて、敵陣へ入りたりし心には似も似ざりけりとぞ、人々申しける。(卷一・左府頼長上落討着到ノ事)

があり、平治物語にも同じく紀信の故事が、

与三衛門馳せて、中に隔てて申けるは、「漢の紀信は高祖の命にかはて、蔡陽の罠を出だし、つひに天下を保たせき。主はづかしめらるる時、臣死すと云ふにあらずや……。」(卷中・待

賢門の軍勢より信頼落つる事)

と引かれている外、王陵が漢楚の何れにも眼せず城を支えていたのを項羽が攻めたが容易に陥らないので、怒つた項羽が謀を廻らして、王陵の母を捕えて楯の面に張り付け、孝行な王陵を降せうとしたところ、それを聞いた母が王陵にひそかに使を遣して、「天下はつひに漢王に服すべし、汝も必高祖の臣となり、あへて楚に降する事なかれ」といって自決した話(卷中・義朝六波羅に寄せらるる事を以て執政心替の事、漢楚戦の事)がある。これらはいずれも蒙

求の「紀信詐帝」「陵母伏劍」によつたものと思われる。「史記」には牝鶉朝する時は、其の里必ず亡ぶといへり（保元物語卷三・無塩君事）などと書名もあがつていて、史記との直接交渉もみとめてよからうが、それが蒙求に載せられていることによつて、いさうの感銘を与えていたのだと考えられる。源平盛衰記には、項羽と高祖とが鴻門で会した話がかんり長く引かれている。周知の故事でもあるから引用は避けるが、その最後に、

「猶も飲みてんや」と項羽云ひければ、「命を失ふとも争でか辞し申すべき、況んや一斗の酒物の数に侍らず」と眸長く裂けて噴み立てる頰魂いふせく思はれるにや、沛公事故なく遁れにけり。忠盛朝臣も、此郎等故に其の夜の恥辱を遁れにけり。（卷一、五節の夜の闘打ち、五節の始め、周の成王臣、下の事）

とある。殿上の闘打に会おうとした忠盛を案じて家貞が小庭に控えていたのを、鴻門の会における樊噲の勇猛に比したのであるが、少し附会に過ぎよう。その附会さは、張良の配慮を没却して、樊噲の剛勇だけが高祖を危険から守つたと見るところに根ざしているのだが、実はこれも蒙求に教えられた見方なのである。蒙求の「樊噲排闥」には、終りに「是日微なかりせむ、噲ほとと幾あま殆」とある。これは史記の樊噲膝濡列伝に「是日微なかりせむ、樊噲ほとと奔入はしりこ、營やう、誦スルコト項羽カキコト沛公ハク事コト幾あま殆」とあるのを約めたものであるが、項羽本紀にも樊噲膝濡列伝にもある樊噲が項羽を誦護（非を強くとがめい）するくだりは蒙求には省かれており、盛衰記もそれに倣っている。つまり、蒙求から得ているからこそ、ただ殿上の小庭に控えていただけに過ぎない家貞が、たやすく樊噲と結びつき得たのである。盛衰記は「樊噲

排闥」のみに拠っているのではない。その前半は引いてない代りに、同じ蒙求が高祖本紀から採つた「蕭何定律」にある高祖の三章の法を合わせ載せているし、そうしたものも統一するものとして、作者の脳中に史記があつたかも知れないが、個々の説話の具体については、やはりアントロジーとしての蒙求がより多く影響を与えていると見るべきである。

蒙求は当時大に行われて、たとえば唐物語に載せられた二十七話のうち少くとも十話は、それぞれの原典からではなくて蒙求を直接の典拠にしていることや、源光行の蒙求和歌の如き諷刺物が生み出されていることから、盛行のさまが窺われる。史記から直接的に、あるいは蒙求の如きを通じて間接的に、漢楚の故事が載記物語に流れ込んでいくわけであるが、同時に又、説話としてもかなり一般に流布していたと思われる。今昔物語（卷十、高祖割項羽、始漢代為帝王語第三）にも鴻門の会を中心に漢楚の争いが語られているが、高祖が大蛇（白帝の子）を斬殺する話が鴻門の会の後の出来事になっていたり、張良が項伯との好誼を高祖に語る話が、逆に項伯が項羽に語ることになっていたりといふ誤伝がある。十訓抄には「彼漢紀信、楚の軍樂陽をかこめる時、高祖にかはりて革車に乗し忠臣にことならず」（第六可存忠直事）と紀信の故事が引かれ、張良が黄石公の兵法を伝える話（第七可専思慮事）も載せられている。宝物集なども、かなり蒙求から出ているが、卷五（石奢カ母ノ事）に、項羽が石奢を呼び寄せようとしてその母を人質にとるが遂に果さなかった話がある。石奢は春秋時代の楚の昭王の賢相（史記循吏列伝）なので時代が合わない。宝物集は王陵の母と混同しているのである。又漢楚戦に直接の関係はないが、「但し漢の高祖

は三尺の劔を掲げて天下を治めしかども、淮南の黥布を討ちし時、流矢に中って命を失ふ」(卷二、左府堯去非大相国忠贞御歎ノ事) という話は、平家物語(卷三、醫師問答)・源平盛衰記(卷十一、梅三人論ノ事)にも語られている。源平盛衰記の「漢の高祖、三尺の劔を掲げし獄卒の武きをは征せず、張良一卷の書に携はりし閻王の責めには躓きけり」(卷三六、維盛住吉詣明神垂迹ノ事)、和漢朗詠集の「漢高三尺之劔、坐制諸侯」張良一卷之書、立登三師伝(帝王)を言いかえたものであるが、朗詠集には他に「項莊之会、鴻門、寄情於一座之客。漢祖之婦、沛郡、傷思於四方之風」(同上)、「燈暗、数行虞氏淚。夜深、四面楚歌声」(詠史)など、漢楚関係のものがある。こうしたさまざまな経路を経て、漢楚の故事が享受者がわにも流れ入り、多少の歪曲を受けながらも、本朝の説話同様に親しまれる基盤は形成されていたわけである。菟玖波集に取められた連歌のうち、本説の付合にしても、——詳しく調査していないが——そのほとんどは盛衰記や太平記に含まれた故事と共通のものである。独居して呻吟する和歌などと異なつて、他人と協同し、しかも当座の感興をよるこぶ連歌のごとくにさえ中国の故事が多く取り扱われ、さらにその故事が当時の戦記物と多く共通している事実は、それがきわめて一般化していたことの証拠である。西尾光一氏の言われる説話的伝承の地盤を、中国の故事に因しても考慮すべきなのである。盲法師が謡った流布本平家物語とは別の筋道を通つた源平盛衰記が、あのように多くの説話を孕み込む形へ発展していった時代の要求を、太平記の場合においても考えねばならず、ひとり太平記作者(よしそれが複数であ

つたとしても)の、術学趣味とか啓蒙意識とかだけで割切るわけにはいかない。

注①山田孝雄氏「蒙求と国文学」(国学院雑誌・大正2・1011)

②西尾光一氏「平家物語における文学的人間像の成立」(文学昭和28・9)「中世の説話」(日本文学講座Ⅱ)等

三

上述のごとく漢楚の故事は、先行の戦記物や説話文学などを通して、一般にも親しまれ続けてきた。そういう伝承の地盤を考えた上で、太平記作者の知識人的性格というものを考察する必要がある。

紀信の話は前述のごとく保元・平治物語、十訓抄などにも引かれていた。同様の簡略な引用は太平記(卷五・大塔宮十津川御入事、卷七・出羽入道攻吉野事并村上義光大塔宮自害事)にもあるが、より詳細に記述しているものとしては源平盛衰記(卷二十・高綱姓名を賜ふ紀信高祖の名を仮る事)と太平記(卷二・尹大納言師賢卿一替主上山門登山事并坂本合戦事)がある。左に両者を対照する。上は太平記、下は源平盛衰記である。

昔強秦亡テ後、楚項羽与漢高祖一
 国ヲ争事八ヶ年、軍ヲ營事七十余
 ケ度也。其戦之度コトニ、項羽常
 ニ勝ニ乗テ、高祖ヲ甚タ苦メル事
 多シ、或時高祖祭陽之城ニ籠ニ、
 項羽兵ヲ以城ヲ圍事數百里也、

昔楚國の項羽と漢朝の高祖
 と位を争ひ戦ひけるに、項
 羽は多勢なり、高祖は小勢
 なり。されども合戦半角に
 して勝負なし。項羽を討た
 せんが為に、高祖楚國へ入

日ヲ經テ城ノ中ニ糧尽キ兵疲ケレハ、高祖戰ハントスルニ力ナケレバ、爰ニ高祖ノ忠臣ニ紀信ト云ケル者、向ニ高祖ニ申ケルハ、項羽今城ヲ囲專數百里、漢已ニ食尽テ士卒又疲レタリ、若兵ヲ出シテ戰者（楚相を以て）非レ漢爲レ楚、擒トナカランカ、只敵ヲ欺テ、潛ニ城ヲ逃出ニハシカシ、願ハ臣今漢王之諱ヲ犯シテ楚ノ陣ニ降ラン、楚此ニ囲ヲ解テ臣ヲ得ハ、漢王速ニ城ヲ出テ、重テ大軍ヲ犯シ、忽ニ楚ヲ亡シ給ヘト申ケレハ、紀信カ忽楚ニ降テ殺レム事ハ悲ケレ共、高祖社稷之爲ニ身ヲ可輕（ニクス）非ハ、力無涙ヲ押ヘテ、別ヲシタヒナカク、紀信カ謀ニ隨給フ、紀信大ニ悅テ自ニ漢王之御衣ヲ着シ、黃屋之車ニ乘リ、左（左）ツイテ、高祖罪ヲ謝シテ、楚之大王ニ降ト呼テ、城之東面ヨリ出タリケリ、楚之兵是ヲ聞テ、四面ノ圍ヲ解テ、一所ニ集ル、軍勢皆方歲ヲ唱フ、此間ニ高祖卅餘騎ヲ順テ、自ニ城之西門ニ出テ、成皐ヨリ落給ケル、夜明テ後、楚ニ降ル漢王

と聞えければ、楚国の大勢悦びて高祖を待つ。高祖は革車に乗って官兵を従へたり。項羽が兵の多勢に囲まれ高祖逃れ難かりけるに、紀信と云ふ者、高祖の車に乗り替つて帝を逃し奉り、「我は高祖なり」と名乗りければ、敵誠と思ひつゝ革車を囲みてこれを搦み見れば、高祖にはあらず、紀信と云ふ者なり。項羽これを捕へて、「我に随ひ降人にならば赦さん。」と云ひければ、「忠臣は二主に仕へず、勇士は詔言を得ず。」と云ひて従はざりければ、兵革車に火を付けて、紀信をぞ焼き殺しける。

ヲ見レハ、高祖ニアデテ、其臣ニ紀信ト云者也ケリ、項羽大ニ怒テ、遂ニ紀信ヲ煎殺ス、高祖雖而成皐之兵ヲ卒シテ、却テ攻メ項羽、々々カ勢已ニ尽テ後、遂ニ烏江ニシテ打レシカハ、高祖長ク漢之王業ヲ起テ、天下之主ト成ニケリ、兩者の記述を、その原典である史記（項羽本紀）と比較検討してみよう。

漢軍三祭陽。築甬道、順之河、以取敖倉粟。漢之三年、項王數侵吾漢甬道。漢王食乏、恐請和、割祭陽以西爲漢。項王欲聽之。歷陽侯范增曰、漢易與耳。今秋弗取、後必悔之。項王乃与范增急圍祭陽。漢王患之。
（中略）漢將紀信說漢王曰、事已急矣、請爲王誑楚王。王可也。以間出。於是漢王夜出女子祭陽東。被甲爲二千人。楚兵四面圍之。紀信乘黃屋車、仰左轡。曰、城中食尽、漢王降。楚軍皆呼方歲。漢王亦与數十騎從城西门出、走成皐。項羽見紀信、問漢王安在。信曰、漢王已出矣。項羽燒殺紀信。

一見して明らかかなことは、太平記がきわめて原話に忠実な点である。欒求（紀信詐帝）では高祖が祭陽で楚軍に包囲されて食糧不足に陥る部分は省かれており、さらに太平記の「黄屋之車ニ乘リ、左轡ヲツイテ」は、欒求の「信乃乘三王車、黄屋左轡」からは出ない。史記の本文に拠っているのである。盛衰記に「革車」とあるの

は十訓抄と同じで、伝承的なものが生の形で表われており、原話とはかなり違っている。太平記の記述にもかなり附加的部分があるが、それは盛衰記のような作り事ではなくて、あくまで原典に即しつつ、史記独自の簡潔な文章をそのまま読み下したのでは表現不足になるところを敷衍しているのである。強いて言えば、史記の談義なのである。

芳賀幸四郎氏の御調査によれば、室町期の五山禅林において史記が大いに喜ばれ、講釈講筈もかなり行われている。それに対して公家社会における史記への関心は必ずしも濃密なものではなかったという^①ことである。記録にあらわれた限りではそうかも知れないし、まして南北朝ごろとなると、記録も乏しいので実情は知り難い。天皇が読書始に侍読をして史記・漢書・貞観政要などを進講せしめるのは普通のことであった。史記関係のものを統史愚抄から拾い上げると、文保二年三月二五日(五帝本紀・侍読菅原在兼)、元弘元年十月(五帝本紀・菅原公時)文和四年六月九日(五帝本紀・菅原長綱)、延文三年正月三十日(孝文本紀・同)延文四年正月二六日(五帝本紀・同)、貞治二年正月二五日(孝文本紀・同)貞治三年正月二九日(孝本本紀・同)、貞治四年正月二五日(孝文本本紀・同)、応安四年四月二九日(五帝本紀・同)などがある。これらももちろん、紀伝文藝道の家学を伝える晋家が侍読となって、天皇に漢籍の句読を進講する儀式としてのそれであるが、延文四年二月八日には宮中(北朝)において史記の談義が行われている。そうした機会には、崇光天皇が阿一法師を召して尙書を講せしめられた(統史愚抄、康安元年六月一日)ように、在野の学識高い僧などが召集されたのかも知れない。延文五年・応安元年ごろには近衛道嗣なども盛

んに韓愈文集・左伝・周礼・莊子などの談義・講談を催している(愚管記)。言う所の談義や講談が一体どのような方法による漢籍の享受であったかはわからないが、上に述べたような太平記作者の読みとり方、すなわち原典に即しつつ敷衍していくという方法に通うものがあつたのではないか。

太平記(巻二十八)の「漢楚戦之事(吉野殿被成綸旨事)」は、観応元年(一三五〇)十月、九州で蜂起した直冬を追討するため、尊氏は高師直以下を率いて西下するが、その前年からすでに高師直と之際のあつた直義は尊氏が進発する前々夜(十月二六日)に京都を逐電し、南朝に降参を申入れたので、吉野では今を機会に直義を誅伐しようとする洞院與世と、請いを容れて尊氏を討たしむべきだとする二条師基の意見が対立し、なかなか結論が出なかつたときに、北畠親房が漢楚の故事を引いて直義の降参を容れるように衆議を導くという話である。次に延々と、九千字に及ぶ長さで語られている漢楚故事の最後に、「項王遂ニ殞ヒテ、漢七百年之祚ヲ保シ事(平)ハ、唯陳兵・張良カ謀ニテ偽テ和陸セシ故也、其知謀今当レリ、然レハ但直義入道カ謝シ申旨ニ任テ、先御合牒アラハ、定テ君ヲ御位ニ即奉セテ、万機之政ヲ四海ニ施コサレン歟(下略)」とある。陳平・張良の謀による和睦というのは、漢の三年に、自軍の優勢を機に高祖からいったん和を講じ、それを信じた項羽が兵を退こうとした所を急追して勝利へ導いた事を指している。ただそれだけのために、漢楚連合して秦を討つことから筆を起して、項羽が烏江で死ぬまで、ほぼ完全な漢楚合戦の物語を語っているのである。作者は、項羽本紀だけに拠らず、高祖本紀をもつきまぜて彼此相補うている。たとえば、

或時項王之陣ニ高キ組ヲ作リテ其上ニ漢王之父太公ヲ置テ、高祖ニ告テ曰ク、是沛公父ニ非スヤ、沛公今首ヲ演テ楚ニ降ラハ、太公ト亦カ命ヲ資ケン、沛公若楚ニ下サラスハ、急ニ太公ヲ殺スヘント申ケル、漢王是ヲ聞テ、大ニアサ笑テ曰ク、吾項羽ト共ニ北面ニシテ命ヲ懷上ニ受シ時、兄弟タラム事ヲ盟キ、然吾耶ハ汝カ耶也、今若カ父ヲ殺サハ我其一盃之羹ヲ分テト欺ムカレケレハ、項王大ニ怒テ、即太公ヲ殺サントシケルヲ、項伯堅ク諫メケレハ、ヨシヤサラハトテ、太公ヲ殺ス事ハ止ケリ、漢楚久シク相支テ、未決ニ勝負、丁壯ハ軍旅ニ苦ミ、老弱者輒漕ニ罷、

項王患之為高祖、上告漢王曰、今不急下、吾恐太公能安齊、漢王曰、吾與項羽俱北面、受命懷王、曰約為兄弟、吾翁即若翁、必欲烹而翁、則幸分我一杯、項王怒欲殺之、

韓信已破齊、使人言曰、齊邊楚、樞輅、不為假王、恐不能安齊、漢王欲攻之、留侯曰、不如因而立之、使自為守、乃遣張良操印授、立韓信為齊王、項羽聞龍且軍破、則恐、使肝台人

或時項羽自甲冑ヲ磨シ文ヲ取テ、一日ニ千里ヲ翔ル驍ト云馬ニ打乘テ、只一騎川之向岸ニ啓テ宜ヒケルハ、天下之士卒戰ニ苦ム事已ニ八ケ年、是我与沛公、只兩人ヲ以ノ故耳也、坐ロニ四海之人民ヲ假マサンヨリハ、我与沛公、獨身ニシテ雌雄ヲ可決スト招テ、敵陣ヲ睨シテソ立タリケル、爰ニ漢王自輜幕之中ヨリ出テ、項羽ヲ攻テ宣ケルハ、夫項王自ニ無義ニシテ天ノ罰ヲ招ク事、其罪一ニ非ス、始項王ト与ニ命ヲ懷王ニ受シ時、先入テ関中ヲ定メタラン物ヲ王ト為ント云キ、項羽兀ニ約ヲ負テ、我ヲ獨漢ニ主タラシム、其罪一、宋義懷王之命ヲ受ケ、細士冠軍ト成処ニ、項羽狽ニ其帷幕ニ入テ、自郷士冠軍

項伯曰、天下事未可知、且為天下者不顧家、離殺之、無益、祇益禍耳、項王從之、漢楚久相持未決、丁壯黃軍旅、老弱罷、項王謂漢王曰、天下一何何、數歲者、徒以吾兩人耳、願与

武涉、往說韓信、韓信不聽、楚漢久相持未決、丁壯黃軍旅、老弱罷、項王謂漢王曰、天下一何何、數歲者、徒以吾兩人耳、願与

△首ヲ截テ、懷王我ヲシテ是ヲ
 誅セシメタリト偽テ、命ヲ軍中
 ニ出ス、其罪二、(中略) 項羽
 人ヲシテ陰カニ懷王ヲ江南ニ殺
 セリ、其罪九、此ノ九ノ惡ハ
 天下ノ指サス処、道路目ヲ以憎
 ム者也、大逆無道太シキ邪、天
 豈公ヲ刑セサランヤ、奈ソイ
 タツラカワシク項羽ト独身ニシ
 テ戰フ邪ヲ致サン、公カ力山
 ヲ拔ト云共、我翁之天ニ協ヘル
 ニハ不_レ如、而ハ刑余之罪人ヲ
 シテ、甲兵金革ヲステ、挺禁ヲ
 作テ項羽ヲハ擊殺スヘシト欺キ
 テ百万之士卒、同首ニ斃_レヲ抑テ
 同ツト笑フ、

漢王挑戰	項羽負約
洪、離、雄、	王我於野
母、徒、苦、夫	漢、罪一
下之民父	項羽矯殺
子、為、也	鄉士冠軍
漢王笑謝	而自尊
曰、吾寧	罪二、(中
爾、智、不	略) 項羽
能、爾、力、	使、入、陰、獄
項王令壯	義帝江南
士出挑戰	罪九、夫
漢有善騎	為、入、臣、而
射者樓煩	試、其、主、
楚挑戰三	殺、已、降、
合、樓煩	為、政、不、平、
軋射殺之	主約不借
項王大怒	天下所不
乃、自、被、甲	容、大、逆
持、戰、挑、戰	無、道、
樓煩欲射	十也、
	吾

之、項王	以義兵從
瞋目比之	諸侯誅殘
樓煩目不	賊、使、刑
敢視、手	余罪入擊
不敢發、	殺項羽、
遂走還入	何苦乃与
壁、不、敢	公挑戰
復出	項王大怒
	伏弩射中
	漢王、漢
	王傷臂
	乃捫足曰
	處中吾指

……点を附した箇所は太平記が項羽本紀によつたものであり、
 △△△△△△点は高祖本紀からとつたものである。武田泰淳氏の
 習われるように、司馬遷が、項羽なり高祖なり、それぞれ「政
 治的人間」(世界を動かす個人)を通して、史記的世界の構造を立
 体的に把握しようとしたのに対して、太平記作者は両本紀を同一平
 面上に並べて、「事件」としての完全な記述を期しているといえ
 る。歴史の編纂方式が紀伝体であると編年体であるとの相違にも関
 連するであろうが、このような太平記作者の態度は、ただに中国故

事の引用態度にとどまるだけでなく、南北朝五十年史と対決した作者の態度そのものにも関わるものであることは注意していい。

上掲文中、傍線をつけた部分は作者の附加した個所であるが、見るように殆んど必要な最小限に筆を抑えている。ところが又、その限度をかなり越えた補綴をも見出すことができるのである。

(樊噲)軍門之内へ入ラントス、門ノ左右ニ交戦之衛士五百餘人、戈ヲ支へ、太刀ヲ拔テ、是ヲ入シトス、樊噲大ニ怒テ、其楯ヲ身ニ横へ、門ノ関木七八本押折テ、内ヘツト走入レハ、倒ルヽ扉ニ打倒サレ、鉄ノ楯ニ突倒サレテ、交戦之衛士五百人地ニ臥シテ皆起アカラス、樊噲遂ニ軍門ニ入テ、其帷幕ヲ袋ケ目ヲ唄カシテ項王ヲハタト睨テ立ツ、髮ツラサマニアカリテ、胃ノ鉢ヲ生貫キ、獅子之怒リ毛ノ如ニ卷テ、百千万之屋トナル、目ノ眦逆サマニ裂テ、光レルコト百鍊之鏡ニ血ヲ洒クカ如也、其長九尺七寸有、忿レルヒケ左右ニ別レタルカ、鏃突シテ立タル体如何ナル悪羅羅刺モ是ニハ過シト見タリケル、項王是ヲ見給テ、自劔ヲ脱キカケ、跪テ(下略)

傍線の部分が作者の補足である。樊噲の勇猛な威容を強調しようとしたものであるが、奥に大げさな、無邪気に失する誇張がそこにある。これは当時の合戦における武士の剛勇ぶりを描く場合にもしばしば用いている手法であり、そうした誇張に喝采を送る享受層の意識の低さとも関連することでもあるが、同時に作者の知識人的性格なるものも無限定に云々すべきでない一つの証左であらう。合戦の記述に関しては、媒介者たる都市人や下層武士によって既に誇張されたものが作者にもたらされることもあり得よう。しかし漢籍の原文に即して筆を進めながら、なおこのような誇張を好んで用いてい

るのである。作者がもっている原典復帰の態度と、この誇張に酔える傾向とを統一的に捉えることによって、作者の知識人的性格を定位する必要がある。富倉氏の言われるように、かつては公家的教養を身につけた時代の没落者を物語僧のうちにも求め得るならば、彼らこそ太平記の作者にはふさうものであらうか。

太平記には漢楚それぞれに属した武将の名を列挙している。高祖に属した連中の名は高祖本紀・呂后本紀などから寄せ集めたものかと思われるが、項羽の方は明らかに項羽本紀の論功行賞の記述に拠ったものである。すなわち

項王乃立章邯為雍王、王咸陽以西、都郿丘。長史欣者故為櫟陽獄掾、嘗有德項梁。都尉董騷者本勳章邯降楚、故立司馬欣為魏王、王咸陽以東至河、都櫟陽。(下略)

の如く記録したものを、「其外今融付ケル兵二者、櫟陽長史欣、都尉董騷、魏王司馬欣(下略)」のように、勢揃えの体裁に書きあらためたものである。これは戦記物の伝統的な方法が、中国故事の引用の上に逆移入されたものであって、そうした細工の上にも、物語的 な性格があらわれているのではないか、と思われる。

注①芳賀幸四郎氏「東山文化の研究」(第一篇「五山禪僧の教養と世界観」第二章、「公家社会の教養と世界観」第三章)
②武田泰淳氏「司馬遷—史記の世界—」

四
時には補綴の筆を加えながらも、太平記作者が、史記を坐右に置

いて、かなり忠実に翻譯していったことは認めていい。作者が史記のいかなるテキストに拠ったかは不明であるが、ただ注目すべき点を指摘しておきたい。項羽が四面楚歌の中で虞美人と最後の別れを交す場面は、英雄の悲壮な最期の物語として周知のものだが、太平記（巻九・五月七日合戦事、六波羅落事）にも語られており、西源院本や神田本では、項羽のいわゆる垓下歌が、

力拔山兮、氣蓋世、時不利兮、威勢墜兮、

離不逝、々々々、可奈何、何、奈若何

となつてゐる。これは今見る史記の本文とは異なる。史記では第四句の「威勢墜兮」がないのである。漢書（陳勝項籍伝）もそうなつてゐる。吉川幸次郎氏によれば、太平御覧（巻八十七皇王帝）、郭茂倩（宋）の樂府詩集（巻五十八琴曲歌辭「力拔山操」）、朱子の楚辭後語（巻一「垓下帳中之歌」）、馮惟訥（明）の古詩紀（巻十二「垓下歌」）等もすべてそうなつてゐる由である。ところが、わが国五山の僧、桃源瑞仙（一四三〇—一四八九）の史記鈔には、「力拔山兮氣蓋世時不利兮、古本ニハ此ニ威勢墜威勢墜兮ト云七字カアルソ」と注している。これについて、吉川博士は、

桃源のいわゆる史記の古本が、いかなる性質のものであるかは、明かでない。ただそれが日本人によつて妄改されたものであるかなく、唐土の一種の本を伝承したものであることは、わが国における漢籍伝承の一般的な歴史からいって、たしかである。

また威勢墜という措辭も、日本人の容易に偽作し得るものではないであらう。（中略）もっとも私は、このテキストをよきすぐれたものとして、主張するのではない。ただこのテキス

トによれば、詩は四句でなくして五句となり、競争者劉邦の大風歌が三句であるのとひとしく、奇数句の韻文となることは、私をしてこのテキストに興味を感じさせる又一つの事柄である。

と言つておられる。異文を有する古本の存在を証するのは桃源鈔だけらしいが、桃源鈔は文明七年（一四七五）に着手され、二年後の九年十二月に完成を見たものである。太平記が「近日歌天下」（洞院公定日記）ばれてゐた応安七年（一三七四）は、これより百年も遡るわけだが、その太平記には桃源鈔にいう古本とほぼ同形（威勢墜の三字が脱落。おそらく威勢墜々々々兮となつてゐたのだらう。）で出てくる。平家物語（巻十・千手前）には、平重衡が千手前に向かつて橋相公の「燈暗教行眞氏涙」（朗詠集・詠史）を朗詠する場面があるが、作者はこの朗詠を説明して、「項羽戦負て亡ける時、雖と云ふ馬の一日に千里を飛に乗て、虞氏と云ふ后と共に逃ざらんとしけるに、馬如何思ひけん、足をととのへて動かず。項羽涙を流いて、『我が威勢既に墜れたり。今は逃るべき方なし。敵の襲ふは事の數ならず、此后に別なん事のかなしさよ』とて終夜歎き悲み給ひけり（下略）」とある。長門本は、頼朝が朗詠の意を聞き大江広元が説明する形になつてゐるが、「昔唐に漢の高祖と申ける帝、ぐしと申みめよき女をけり愛せられけり、楚の項羽と申者高祖を襲ひけるに」と、高祖と項羽が完全に入れ替つてゐるが、垓下歌に当る部分は流布本と同様である。盛衰記も頼朝の間に答えて齋院次官親義が説明する形になつており、「これは史記項羽本紀の文なり」と前置するだけあつて、長門本のような無智さは露呈していないが、「雖と云ふ第一の馬に乗つて出でんとするに馬身を振つて出

でず、駅と云ふ第二の馬に乗つて出でけるに」といふような素朴な合理化の滑稽さがあり、詩形も「力山を抜き威は天を覆ふ、天副ひせず雖何、天副ひせず虞氏何」と乱れている。少なくとも平家物語の場合は、太平記と同形のものから出ていると推定できる。それがいかなるものであるかは全くわからないが、太平記は桃源のいう「古本」系統のものに拠ったのであることは言えそうだ。その太平記も流布本になると、現行の史記と同じ詩形になる。

注①吉川幸次郎氏「項羽の垓下歌について」(中国文学報第一冊、一九五四年十月)

②京都大学、田中誠一氏の御示教を頂いた。記して謝意を表す。

③岡田正之氏「日本漢文学史」(第四期室町時代、第三章訓点と国字解)

五

先に述べたように、漢楚合戦の物語は太平記巻二十八に長々と語られていたのであるが、そこでは垓下歌は挙げられず、「項羽落へキ方無シテ垓下之城ニッ羅ラレケル、漢之兵是ヲ囲ム事数百里、四面皆楚之歌スルヲ听テ、項羽是ヲ限リト思ハレケレハ、美人虞氏ニ向テ涙ヲ流シ、詩ヲ作テ、悲歌慷慨シ、給フ、虞氏悲ニ不堪、劍ヲ賜テ自其刃ニ貫ヌカレテ臥ケレハ」とあるだけである。これは巻九に歌を掲げてより詳しく述べてあることと関連づけて考えねばならない。また巻二に詳述された紀信の故事は、巻二十八では全然省略されている。さらに、范增の進言で楚王の子孫を王に立てた話は巻三十七(漢楚立義帝事)に詳しいが、巻二十八ではただ「沛公・項羽相共ニ古之楚王之末ニ孫心ト云シ人之民ト成テ、羊ヲ飼イシヲ取立テ義帝ト号シ」とあるだけである。また、秦の將軍李由を討つて關

つた楚の將軍項梁(武信君)を、副將軍宋碭が「武信君今如此、亡スンハ有ヘカラス」と諫言した話は、巻十(大和田風源氏事)に述べられてあつて、巻二十八では全然触れていない。このように見ていると、漢楚合戦に関する限り、太平記四十巻は全体的な見通しの上で配置されていることになる。これは「書継」の問題と関連する。

さて、上來述べてきたことをまとめると、まず、太平記に漢楚の故事が取り上げられるには、やはり説話的な伝承の地盤があつたことを無視してはならないこと。第二に、作者はそうした地盤に立ちながら、同時に原典に復帰しようとする。第三に、作者のそういう態度が、盛衰記や長門本平家物語に見られるような説話的伝承にとりもなう類形を救済したのであるが、後期五山禅僧のようなひたむきに原典に肉迫していく態度は持ち合わせぬ彼は、原典に即しつつも、語り物的な誇張の筆を加えていること、などの点があげられる。この原典復帰と語り物化という二原理に支えられた太平記中の中国故事は、それ故にこそ、文化的に高揚しつつあつた当時の武士階級や都市人が求めるところのものに、もっとも妥当し得たのだと思われる。これ以後、応永初年(一三九四)ごろに成つた三國伝記が多くの説話を太平記から得、文安二・三年(一四四五―一四五六)に成立した塩麩抄も亦同様であること、しかも両者とも、太平記からは主として中国の故事を引いていることを考えれば、太平記作者の中国文学の受容態度を支援する絶大な力が背後にあつたことが窺われる。

注①築瀬一雄氏「三國伝記出典考」(一)太平記と関係ある説話について(「中世日本文学序説」所収)

②高橋貞一氏「塩麩抄と太平記」(国語と国文学、昭和34・8)

— 広島大学教育学部福山分校附属高専校教諭 —